バイリンガル教育が一因と考えられた言語発達遅滞例

宇高二良[1)]、佐藤公美[2)]、長嶋比奈美[2)]、武田憲昭[2)]

1）日耳鼻徳島県地方部会学校保健委員会

2）徳島大学耳鼻咽喉科学教室

言語発達遅滞の主因は知的障害など生得的な理由によるものであるが、少子化、核家族化、虐待、ネグレクトなど近年の社会的変化によって、言語発達遅滞を来す小児が散見されるようになってきた。

今回は、母語獲得の重要な時期に、様々な理由でバイリンガル教育を強いられたことが一因となり、言語発達遅滞を生じたと考えられる3症例を経験したので報告する。

症例1　5歳4ヶ月　女児

主訴　ことばが不明瞭

経過　左唇顎口蓋裂術後。今回、構音異常とともに言語発達の遅れを指摘され、言語訓練の目的で当院を受診した。

母親は日本人、父親は中国系カナダ人で、出生以来家族で日本に暮らしている。将来どちらの国に住むかは決定していない。父親は日本語の聴き取りは多少できるが、全く喋れない（喋ろうとしない）。

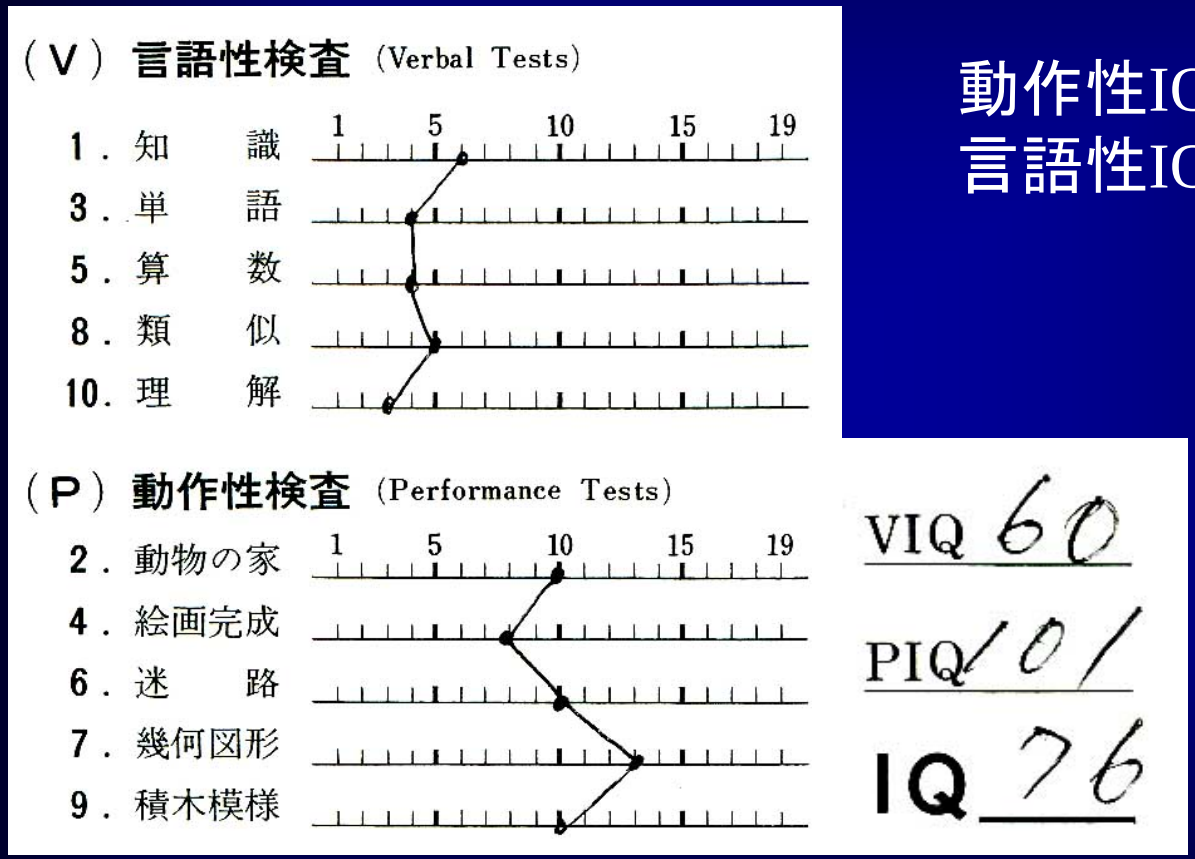
本児と母親の会話は日本語。

父親と本児、母親は英語で会話をしている。

今年度より、地元の幼稚園に通園開始。

絵画語彙発達検査　生活年齢　5歳5ヶ月時
語彙年齢　3歳4ヶ月　評価点　2（劣）

WPPSI知能検査



動作性IQに比し、
言語性IQが著しく低い

軽度知的障害に環境的要因が加わっている。

訓練場面

ビデオが再生出来ない場合はこちら

獲得語彙数が少なく、聞き間違いが多い。非常に幼い印象。

症例2　初診時年齢　5歳8ヶ月　女児

主訴　ことば数が少ない、やり取りができない

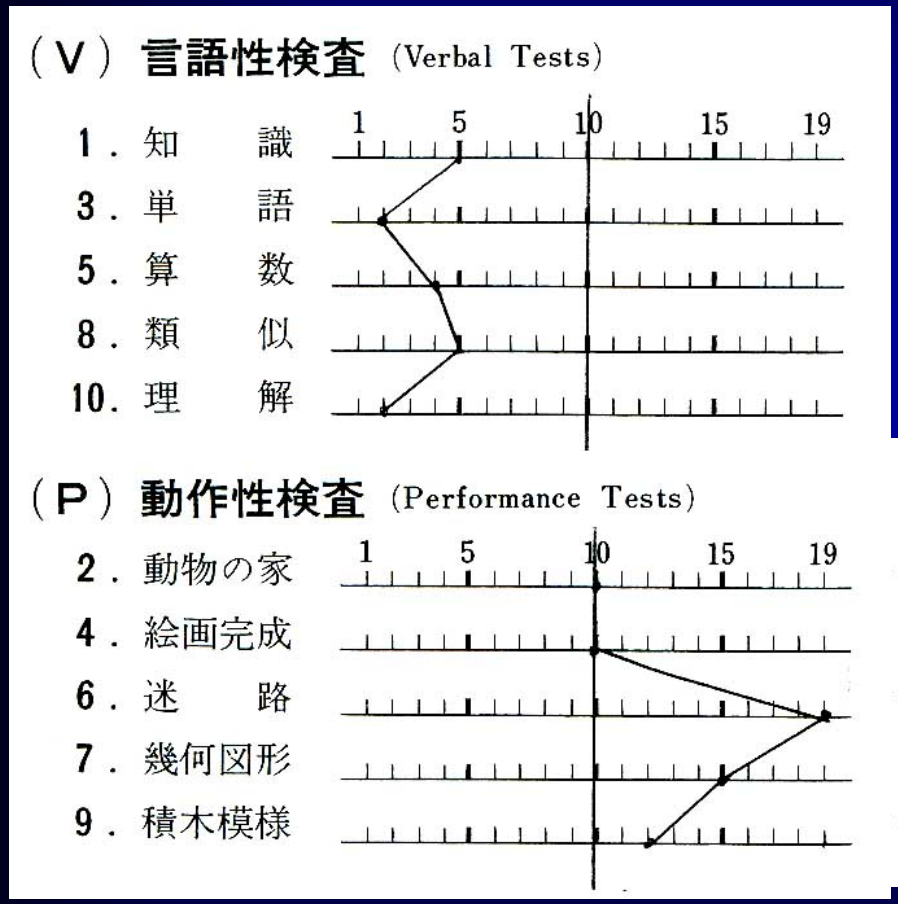
経過　父親の転勤に伴って1歳3ヶ月に渡米し、5歳6ヶ月で帰国する。子どもをバイリンガル児に育てたいとの願いから、渡米直後より地元の保育所に預けた。昼間の保育所では、英語のみの環境。家庭では、日本語のみの生活を4年余過ごした。

帰国後、近くの幼稚園に入ったが、言語の遅れを指摘され、言語訓練の目的で当科受診。

帰国後も、培った英語能力を維持できるようにとの母親の希望で英会話教室に通わせている。

絵画語彙発達検査　生活年齢　5歳8ヶ月時
語彙年齢　3歳6ヶ月　評価点　2（劣）

WPPSI知能検査



動作性IQに比し、
言語性IQが全般的
に著しく低い

VIQ 54

PIQ 124

IQ 86

生来の軽度知的障害に、環境因子が加わっている

初診時検査風景

ビデオが再生出来ない場合はこちら

会話は単語でしか理解できていない。構音のひずみはない。

症例3　初診時年齢5歳1ヶ月　女児

主訴　他の子どもとことばのやり取りがうまくできない

経過　父親は高校英語教師。英語能力を獲得するために、2歳頃より、テレビの英語番組を録画し、毎日1時間程度見せた。また英語のうたのテープを1ヶ月交替で毎日歌わせていた。

お稽古事として、バイオリン毎日30分。公文式算数週2回。英語幼児教室週1回。その他に、テニス、クラシックバレー、水泳。

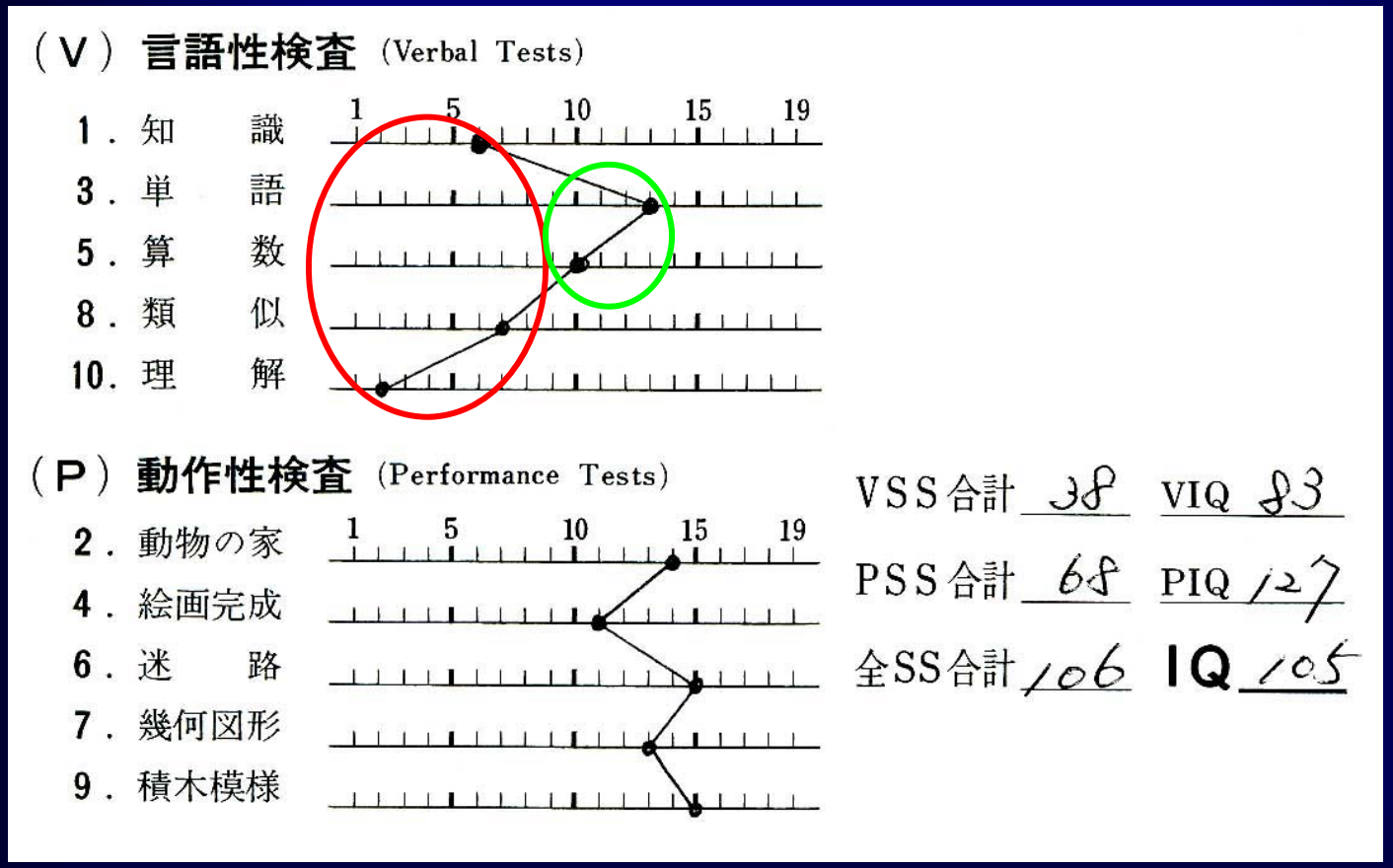
英語ネイティブスピーカーと日常会話可能

幼稚園（私立、進学校）で友達とうまく話せない

絵画語彙発達検査　生活年齢　5歳1ヶ月時

語彙年齢　4歳11ヶ月　評価点　9（中）

WPPSI知能検査



動作性検査や作業学習的な言語検査に比べて、
思考の必要な検査項目が極端に悪い

対応および経過

症例１：理解語彙の拡大、聴覚的理解力の向上

日本語主体の生活を助言・指導

→語彙数は増えつつあるが、日本語の一本化には至らず。

症例２：理解語彙の拡大、聴覚的理解力の向上

英語学習の中断を進言

→英会話教室の利用を止められず、語彙数の増加は進んでいない。

症例３：日本語で思考する習慣の形成

言語訓練の提案と英語学習の中断を指導

→習い事が忙しいことを理由に途中で来院しなくなる。本児の就学後の学習や対人関係の問題が危惧される。

ま と め

・母語獲得期（2歳～5歳）の第二言語教育は慎重に

・生来の言語的弱さ（知的障害、発達障害など）があると、影響が強く出やすい。

・保護者の「英語至上主義」を修正することは容易でない。